

財団法人国際高等研究所
1999年度（平成11年度）
事業計画

本財団の設立理念に照らし、基本構想の具体化を図る。

特に、財団創設15周年を迎える来年度においては、発展期を迎えた研究所の存在意義をより明確なものにするとともに、学術研究機能をさらに強固なものにし、新たな世紀に向けて研究所を展開させていくための礎を築くために、研究事業を中心とする事業運営の活性化に向けた取り組みを行う。

これらを通じて、関西文化学術研究都市における中核的施設としての役割を果たすことを目指し、「学者村」の運営に努める。

1999年度の主な事業計画は、以下のとおりである。

[1] 総括

〔1〕研究事業の積極的な推進

自主財源（基本財産運用益・運用財産の活用）をはじめ、文部省「科学研究費補助金」、日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」、科学技術振興事業団「戦略的基礎研究推進事業」等の公的資金を活用し、課題研究、準備研究、特別研究、受託研究等の研究事業の推進を図る。

〔2〕卓越した研究者の招へい

本研究所の研究環境を活かし、研究活動の活性化を図るため、国内外の卓越した研究者を「招へい学者（IIAS Fellow）」として招へいするとともに、各分野で中核として研究を推進している研究者を「招へい研究者（IIAS Researcher）」として招へいする。

〔3〕若手研究者の育成

優秀な若手研究者の研究を奨励するために設けた「特別研究員」制度、及び1999年度から新たに設ける「研究員」制度を活用し、若手研究者の育成を図る。

〔4〕研究成果の取りまとめ及び評価

1998年度に終了する研究事業ならびそれ以前に終了した一部の研究事業については、その研究成果を1999年度内に取りまとめるとともに、インターネット出版を含む学術出版や研究成果を一般に公開する講演会の開催等、研究成果の公表に努める。

また、研究成果に関する評価システムの確立に努める。

〔5〕研究環境の整備及び情報発信機能の充実

本研究所の情報基盤を整備・拡充し、高度情報化に向けた取り組みを推進する。情報メディアを活用して研究活動及び研究成果の公表を行うとともに、学術出版や広報活動等についても積極的な展開を図る。

〔6〕財団創設15周年記念事業の開催

財団法人国際高等研究所が文部省の認可を受けて創設（1984年8月22日設置認可）されて、1999年度で15年目を迎えることから、財団創設15周年記念事業として、記念式典、記念学術講演会、ならびに記念出版を企画実施する。

〔7〕研究資金の充実

運用財産の一部を研究資金として活用するとともに、公的資金の導入を図る。また、企業等の協力を得て賛助会員の募集に取り組み、研究資金の安定確保に努める。

[2] 研究事業の推進

〔1〕 課題研究

1999年度における課題研究は、継続研究である4研究事業と、1998年度の準備研究の成果を踏まえ、課題研究に移行する2研究事業の計6件を推進する。

(1) 「言語の脳科学—言語獲得と障害の脳理論を目指して—」

(1997年度開始、1999年度終了予定)

近年、PET (Positron Emission Tomography) やfunctional MRI (Magnetic Resonance Imaging)などが普及し、人間の脳の活動を可視化できるようになってきた。人間の脳の活動を可視化できるようになった今、人間固有の機能である言語処理の脳内メカニズムを解明できる可能性が出てきた。しかしながら言語の処理過程はコミュニケーションという大きな目的を実現するための部分過程であることも認識しておかねばならない。したがって、子供の(言語、非言語による)コミュニケーション能力の(遅滞を含む)発達的研究、失語症やある種の失行症に関する神経心理学的研究など広い視野からコミュニケーション過程の計算論的枠組みを提案することが急務であると思われる。本研究プロジェクトでは、言語心理学、発達心理学、認知科学、計算論的神経科学、神経心理学などの研究を背景に言語の脳内過程に関する理論的枠組みを構築することを目的とする。

本課題研究は1999年度が最終年度であり、研究成果の取りまとめを視野に入れた事業展開を図る。これまでの成果を踏まえて、言語理解と生成に関する脳内メカニズムについて研究会で情報を集約し、現時点での全体像をまとめるとともに、今後の脳研究の方向性を明確にする。このため、これまでの研究会で十分に議論できなかったいくつかの分野を重点的に検討する。具体的には、カテゴリー的に構造化された知識の獲得と利用、構文的知識の獲得過程、特殊な言語様のコミュニケーションとその発達などに関する研究者を招聘して研究集会を開催する。

また、海外研究者として、米国より3名、欧州より5名を招へいする予定である。

研究代表者：乾 敏郎 京都大学大学院情報学研究科教授

国際高等研究所特別委員 (4月就任予定)

専門：心理学、認知科学

(2) 「科学の文化的基底」

(1998年度開始、1999年度終了予定)

科学とそれを成立させている文化的・社会的基盤との関係を総合的に考察し、現代科学の文化的基底を明らかにして、21世紀へ向けての科学と文化との望ましい在り方を探求する。そのために、これまで歴史的に存在した諸文化圏(オリエント、ギリシア、インド、アラビア、中国、中世ラテン世界、近代ヨーロッパ世界など)における科学の在り方を比較考察する。

1997年度の準備研究ならびに1998年度からの課題研究の2年間において、上記の趣旨・目的に沿って、オリエント、ギリシア、インド、中国、アラビア、中世ラテン、近代ヨーロッパ、及び現代科学の文化的基底ないし社会的基盤を問題とする研究会を開催してきた。

本課題研究は1999年度が最終年度であり、研究成果の取りまとめを視野に入れた事業展開を図る。そのため、これまでの研究成果を踏まえた総括的研究会を開催するとともに、海外から研究者を招へいして国際シンポジウム「科学の文化的基底—比較科学史の地平—」を開催し、これまでの研究成果の総括を行う予定である。

研究代表者：伊東俊太郎 東京大学名誉教授
麗澤大学比較文明研究センター教授・センター長
国際高等研究所特別委員
専門：科学史・科学哲学

(3) 「生物研究と生命—生物学の統合化と生命概念形成への寄与—」

(1998年度開始、2000年度終了予定)

20世紀は、DNAの二重らせん構造の発見に象徴されるように、人間を含むあらゆる生物の共通性を認識し、生物を分子機械と見なして、その構造と機能の解明に専心した。共通性を基盤にした生命観の提出という意味でも、これは大きな成果であると言ってよい。しかし、それはまた生物の多様性、歴史性、関係性、一回性などを忘れさせることにもつながったと考えられる。

21世紀を迎えるにあたって、このような視点を踏まえた総合生物学（分子生物学、遺伝学、発生生物学、進化学、形態学、分類学などを統合した新たな学問体系）が生まれつつある。そこでは、DNAの共通性だけに重きを置いた生命観とは異なる新しい生命観が生まれつつある。本課題研究は、統合生物学誕生の動きを把握し、新しい生命観を探ることを目的とする。

本年度までの歴史的考察を踏まえ、1999年度は、海外研究者の招へいも予定して、現場研究者の研究の方向とそれに関連した生命観の変化を扱う。主要な検討課題は、次の3点を予定する。その結果から、生物学の統合の方向・方法と全体像（生命観の基礎）を探る。

- 1) 発生生物学を出発点として、個体発生と進化を含む系統発生を関連付ける。
- 2) 免疫・ガンなど多細胞生物特有の系で、特に遺伝子の機能との関連がわかる分野の次の方向を探る。
- 3) 脊椎動物以外で、脊椎動物を考える上でも重要なモデル系となっている生物（ショウジョウバエ、線虫など）での知見を基礎に、両者をつなぐ方向を探る。

研究代表者：中村 桂子 生命誌研究館副館長
国際高等研究所特別委員
専門：生命科学・生命誌

(4) 「環境と食糧生産の調和に関する研究—人類生存の視野から—」

(1998年度開始、2000年度終了予定)

人口の増大に伴って、環境問題と食糧生産のジレンマは拡大していく。この地球上に人類が生存を続けていくためには、両者の調和をどこに求めたらよいのか。

その解決はもちろん簡単ではないが、人類が抱える最も緊急な課題の一つである。

本課題研究は、当面、地球および地域環境論、食糧生産、人口問題、発展途上国の課題、そして国際食糧問題と食糧政策などの分野の経験豊かな専門家を集めて共同討議を重ね、学際的なアプローチによって、上記の諸問題の解決の手がかりを得て、その総観的な見取り図を描き出すことを目的とする。

その上で重点的な分野について、それぞれの位置付けを確認しながら、個別的な研究を推進する。

1999年度は、多様な問題を抱えるアフリカ大陸諸地域に重点を置く。主要な対象地域および研究課題について共通の認識を形成し、諸問題を探求する。そのため、公開シンポジウム「環境と食糧生産の調和—アフリカからの発想」を開催し、関連分野の専門家と研究組織との交流によって、幅広く討論することから始め、研究会において掘り下げた検討を行う。

また、アフリカ地域への研究者2名の派遣を行い、実地調査を予定する。

研究代表者：渡部 忠世 京都大学名誉教授
国際高等研究所企画委員
専門：農学・作物学

(5) 「臨床哲学の可能性—生命環境の諸問題を軸として—」

(1999年度新規、2001年度終了予定)

「臨床哲学 (clinical philosophy)」とは、現実社会の具体的場面で生じる哲学的な治療を必要とする問題を、自らも「医者」ではなく「患者」の一人として考えていこうとする新しい哲学的活動を指している。

本課題研究では、この臨床哲学を取り上げ、従来の哲学のようなアカデミズムの内部で抽象的な「一般的原理」の探求を目指すのではなく、具体的な「個別事例」から出発することによって既成の原理を揺さぶり、新たな概念の思考スタイルを紡ぎ出すことを試みることを目的とする。

1998年度の準備研究の研究成果を踏まえ、1999年度からの課題研究としては、クローン人間、脳死、遺伝子食料、公的介護、生殖技術等の「生命環境」をめぐる問題に焦点を絞って取り組む予定である。

具体的には、次の課題に関するサブグループによって、研究内容の具体化と問題意識の深化を図る。

- 1) 「臨床哲学」の方法論
- 2) 「生命環境」の文化政治学
- 3) 「生命操作」の倫理学
- 4) 「共生」の思想

研究代表者：野家 啓一 東北大学文学部教授
国際高等研究所企画委員
専門：哲学・科学哲学

(6) 「物質研究における多角的協力の構築」

(1999年度新規、2001年度終了予定)

現在、物質科学及びその関連諸分野においては、多くの研究プロジェクトが進められているが、それぞれ初期の目的に応じた人員構成になっており、新しい発展を目指すときの他のグループとの協力の手がかりが少ない場合が多くある。

本課題研究は、研究プロジェクトを横断する企画をたて、異分野を繋ぐ新しい協力関係を作り、次の新しい発展の出発点を構築することを目的とする。

1998年度の準備研究の研究成果を踏まえ、1999年度からの課題研究として取り組む当面の計画の目標と主題は、以下のとおりである。

- 1) 目標：工学と物質科学の新しい接点の模索
主題：物質科学の発展に基づく光・電子システムインテグレーション
- 2) 目標：計算科学を通じての化学と物理の融合
主題：触媒作用の原子プロセス等
- 3) 目標：物質開発と理論物理の協力
主題：遷移金属酸化物等の強相関電子系の相変化
- 4) 目標：物質開発に関わる数理の建設
主題：合金系の原子配列の基礎数理

研究代表者：金森順次郎 大阪大学名誉教授
国際高等研究所特別委員
専門：物性物理学

「2」準備研究

準備研究とは、課題研究になり得るか否かの検討と、課題研究として採択された場合に研究計画を円滑に実施できるよう、概ね1年を目途に準備的な研究を行うものである。

1999年度の準備研究では、研究期間を延長する2課題と新規の5課題の計7件とする予定である。

(1) 「政府統治 (government governance) の研究—現代日本政府の統治構造—」

現在のわが国においては、政府の過剰介入がむしろ弊害と見なされつつあり、政府の行動と公共目的が乖離し様々な諸問題が噴出している。また、行政改革の試みが成果を上げられないのは、政府の問題に対して十分な理論的検討がなされていないことに起因している。そこで、政府に対して、政府をいかに機能させるのか、統治者としての政府を統治する者は誰か、政府の改革が進展しないのは何故か、という根本的な問いかけが大きな意味を持っている。

本準備研究は、1998年度に引き続き1年間の研究期間の延長によって、政治哲学の問題に対して、組織理論を用いることにより経済学的に接近しようとする学際的な取り組みである。具体的には、日本型政府の問題を射程に入れ、次の4サブテーマを設けて政府統治 (government governance) の理論の構築を目指す。

- 1) 政府の役割
- 2) 政府の内部組織
- 3) 政府・企業間関係の規制

4) 公共事業の費用便益分析と政治的意思決定

研究代表者：本間 正明 大阪大学経済学部教授
国際高等研究所特別委員
専門：公共経済学

(2) 「ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療に伴う倫理問題とそれへの対応」

遺伝子医療がわが国の医療に適用されつつある現状にあって、このような先端医療の指針は一部の学会の方針にとどまっている。ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療に伴う倫理観を、そのままには受け入れ難い文化、社会、宗教的な背景を有するわが国（アジア圏）では、ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療を導入するために明確な論理が必要となる。

本準備研究は、1998年度に引き続き6カ月間の研究期間の延長により、医療に伴う倫理問題を、医学・生物学研究の立場を中心に総合的に研究し、厚生省の取り組みに対して具体的な対応に関する提言を目指すものである。

研究代表者：武部 啓 近畿大学原子力研究所教授
国際高等研究所特別委員
専門：遺伝学

(3) 「感性情報の特徴パターンと情動反応の関連性について—音楽の美しい音の特徴物理量パターンと、これに対応する脳の情動生理反応の関連性について—」

我々が美しいと感じる対象の構造には、文化圏や時代あるいはジャンルに固有の特質がある一方、それらを超えた共通のパターンがあると思われる。また、これに対応して美しいものに接したときに生じる情動には、やはり、共通のパターンがあると感じられる。そして、これらの感性情報と情動の両パターンの間には、ある種の写像関係があり、これがあってこそ美しさへの感動があるのではないか。

この研究は、このような、美的鑑賞の対象にある共通の構造パターンが見い出せないか、またそれと美しさへの感動における情動とがどう関係づけられるかを調べて行こうとするものである。

研究代表者：安藤 由典 東京情報大学経営情報学部教授
国際高等研究所特別委員（4月就任予定）
専門：音楽学

(4) 「次世代ソフトウェアの調査研究」

ソフトウェア分野を中心とする情報技術の諸分野では、変化と進歩の激しい国際環境の中で、次世代ソフトウェアの在り方と、それを具体化する技術の研究が機動的に戦略性をもって推進されなければならない。

本調査研究では、大学および企業の研究者による共同の調査研究・討議など、実質的な産学の交流連携により、これら諸分野の次世代に向けた戦略的方向付け、さらには具体的な研究課題について提言を行うことを目指す。

研究代表者：大野 豊 京都大学名誉教授
国際高等研究所企画委員
専門：情報工学

- (5) 「我ら体細胞にとって生殖細胞とは何か？一何故、そして如何にして、我々は自らの生存には不必要な生殖細胞を作るのか？一」

身体の大部分を占める体細胞は死すべき運命にある。一方生殖細胞は不死であり、個体が死ぬ前にその個体の持つ遺伝子が無傷で運び出しそれを元にして次の世代を作る役割を担う。多細胞生物にとっては、生殖細胞の存在無しには種の保存はあり得ない。しかし、個体の生存にとっては生殖細胞は不要である。これまでの生物学の研究対象は主として体細胞であり、生殖細胞については、受精、未分化、全能性など、体細胞に「成る」ことを前提とし、それに関わる仕組みの研究が主であった。生殖細胞は体細胞とは根本的に異なる性質をも備えている。

本準備研究の目的は、最近急速に進展した生殖細胞特有の問題を対象とする研究を整理し、我々の知識の現状を明確にする。次に、近い将来どこまで研究が進むかを予測する。それらを共通理解として、従来行われてきた体細胞の元としての生殖細胞研究に対して、体細胞に不必要な生殖細胞という視点での研究は、どこまで可能か。また、如何にしたら可能かなどを議論する。

実験科学としての生物学の立場に立つが、進化論的議論に発展する可能性も視野に入れる。

研究代表者：岡田 益吉 筑波大学名誉教授
国際高等研究所企画委員
専門：発生生物学

- (6) 「『一つの世界』の成立とその条件—鎖国時代の日本とヨーロッパ—」

鎖国時代の日本とヨーロッパとの関係についての研究は、明治以来、既に長い歴史をもっている。その主要な関心は、次の2つの領域に向けられてきた。第1が日蘭貿易であり、第2が蘭学、すなわちオランダ語研究とオランダ語を媒介としたヨーロッパ自然科学（医学・博物学・天文学・一般物理学）研究である。しかし、こうした従来の研究は、次の二つの点で大きな制約、あるいは欠陥を持っていた。

まず、○日本の問題を日本一国という狭い枠組の中だけで問題にし、ヨーロッパ側の日本に対する政策と認識（政治的・経済的政策、現実的・創造的日本認識）を十分に顧慮してこなかったこと。さらに、○ヨーロッパが鎖国中の日本に与えた影響は、貿易と蘭学の次元だけにとどまらず、日本美術・文学・思想、及び広く民衆・知識人の創造的世界にまでも及んでいたのであるが、それにもかかわらず、こうした諸側面の検討を無視してきたことである。

本準備研究の狙いは、こうした従来の研究の弱点を克服しながら、ヨーロッパと日本とがその当時、どのような形で多元的諸関係の網目をつくりあげ、その結果、どのように一つの世界を構成しつつあったかを本格的に解明するための手続きと方法とを探り出すことにある。

研究代表者：中川 久定 京都大学名誉教授
国際高等研究所特別委員（4月就任予定）
専門：フランス文学

(7) 「東南アジアにおける地球環境変動に関する国際共同研究の態勢―途上国との研究協力長期発展の立場から―」

東南アジアの大気、海洋、生態系を含む赤道環境は、科学的または社会的に興味ある重要な問題を提起している。この問題解決には、長期に亘る観測、観察が必要である。従来このような観測、観察は純粋に学術的研究のためであり、必要な短期間の現地滞在中、便宜を地域住民から受けるだけで十分であった。しかし、地球環境問題に役立つ長期観測、観察では、地域協力は単に便宜供与ではなく、われわれと同レベルの共同事業を意味する。

今や地球環境問題の理解と解決に役立つ地球科学の研究は、先進国だけでは進められない。途上国が興味と理解を持って先進国に仲間入りすることが不可欠である。

本準備研究では、大気ならびに海洋、生態科学研究においても東南アジアの発展のために有効で、今後重要となる現実的な技術移転、関連教育の実施に関する諸課題について検討するものである。

研究代表者：加藤 進 京都大学名誉教授
国際高等研究所特別委員（4月就任予定）
専門：超高層物理学

「3」特別研究

本財団が、事業主体との間で委託研究契約または共同研究契約を締結して推進する事業の内、特に大型の予算を組み、数年に亘る研究期間を予定する特殊性などを考慮して、特別の推進体制や研究の枠組みを設けて推進する研究事業を「特別研究」とする。

1999年度は、本年度から開始した2特別研究事業を推進する。

(1) 「情報市場における近未来の法モデル」

本特別研究は、日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」として認められた研究事業である。研究期間は、1998年度～2002年度（5年間）。

本研究課題の趣旨は、情報社会における情報と知的財産の創造と流通に関する著作権市場「コピーマーケット」について、法モデルを策定することにある。

具体的な研究課題は、次の5課題である。

- 1) 情報社会の構成単位である知識ユニット論
- 2) コピーマーケットモデルのハードウェア・ソフトウェアのシステム研究
- 3) 革新的な技術のモデル化によるコピーマーケットモデルの構築
- 4) コピーマーケットモデルの法的分析
- 5) 科学の発展、デジタル技術の浸透、経済のグローバル化、地球環境保護、紛争解決制度、知的財産、人間と社会、国際機構と国家法秩序等に関わる重要問題へのコピーマーケットの応用研究

これらの問題別にワーキンググループを編成し、研究集会、国際シンポジウム、外国の研究グループとの共同研究等を予定する。

研究代表者：北川 善太郎 京都大学名誉教授
国際高等研究所副所長
専門：民法

(2) 「器官形成に関わるゲノム情報の解読」

本特別研究は、科学技術振興事業団「戦略的基礎研究推進事業」として認められた研究事業である。研究期間は、1998年12月～2003年11月（5年間）。

高等動物の器官形成は、全面的にゲノムに組み込まれた遺伝情報の逐次的発現に基づいて進行するものと考えられる。初期胚状態を経て、ボディプランが実現化するのに従い、体の各所の器官が生じるべき場所に、特性を異にする細胞集団（器官の芽）が現われ、それぞれに特異的なコミュニケーションを取りながら、殆ど自律的に自己組織化の道をたどる。

研究代表者らによって開発された、個々の器官で働いているmRNAの殆ど全ての構造分子種を網羅的に同定し、それぞれの発現量を高い精度で解析する技術システムを駆使して、器官形成における遺伝子発現のプロフィールを経時的に追い、複雑な調節系にある遺伝子発現の継起事象を遺伝子単位で記載し、器官形成における発現制御のネットワークを明らかにすることを目的とする。

研究代表者：松原 謙一 大阪大学名誉教授
国際高等研究所副所長
専門：分子生物学

「4」受託研究

本受託研究は、宇宙開発事業団から1996年度より受託した調査研究である。1997年度の調査報告書の内容ならびに、本年度の予備的調査の成果を踏まえ、1999年度においても宇宙開発事業団から「宇宙ステーション等の人文社会的利用法に係わる調査研究」の継続受託を予定する。

これは、2001年に予定される地球周回軌道上の宇宙ステーション取り付け型日本実験モジュール（JEM）の打ち上げを契機として開始される国際宇宙ステーションの利用に際し、人文・社会科学領域からみた活用方策、ならびにその意義に関して基礎的な調査研究を行うものである。

「5」共同研究事業

(1) 京都大学数理解析研究所との共同研究

1997年度から開始された京都大学数理解析研究所との共同研究について、1999年度も引き続き事業化を図る。

(2) その他

必要に応じて、大学あるいは他の研究機関との共同研究を実施する。

「6」学術フォーラム

(1) 「複雑系と社会科学の方法」

1998年度に実施した準備研究「複雑系と社会科学の方法」の研究成果を踏まえ、学術フォーラムを開催する。

主宰者：塩澤 由典 大阪市立大学経済学部教授（数理経済学）

(2) その他

必要に応じて、学術フォーラムを企画開催する。

[3] 卓越した研究者の招へい

(招へい学者「IIAS Fellow」、及び招へい研究者「IIAS Researcher」制度)

本研究所の優れた研究環境を醸成するため、本研究所の研究施設を活かし、研究活動の活性化を図るため、国内外の卓越した研究者を「招へい学者 (IIAS Fellow)」として招へいする制度を活用し、1999年度においても10名程度の内外の学者の招へい事業を予定する。

招へい学者は、原則として2ヶ月間本研究所に滞在し、自らの研究を推進すると共に、国内外の研究者との研究交流を通じて、本研究所の研究活動の推進を図る。また、滞在期間中またはその後のしかるべき時期に、当該招へい学者を講師として一般を対象とする公開講演会を開催する。

この他、特別研究等に関連し、若干名の「招へい研究者 (IIAS Researcher)」の委嘱を予定する。

[4] 若手研究者の育成 (特別研究員および研究員制度)

優秀な若手研究者の研究を奨励するために研究奨励金を支給する「特別研究員」制度に加えて、1999年度より特別研究の研究事業に若手研究者を参加させ、研究の進展を促進するとともに、若手研究者の育成を図ることを目的とする「研究員」制度を新設する。

1999年度は、特別研究員として大学院博士課程修了予定者2名、研究員として同じく博士課程修了予定者2名、計4名を新規採用する予定である。

[5] 情報出版事業ならびに研究成果の公表

1998年度以前に終了した一部の研究事業、ならびに1998年度において研究事業が終了する課題研究ならびに準備研究については、その研究成果を1999年度内に取りまとめるとともに、学術出版や研究成果を一般に公開する講演会の開催等、研究成果の公表に努める。

これらについては、インターネット等の情報メディアを活用して、情報出版事業の充実にも努める。

「1」1997年度終了事業

- (1) 課題研究「複雑系の秩序と構造」
- (2) 課題研究「社会情報学」
- (3) 課題研究「わざ学」
- (4) 準備研究「予測の数学」

「2」1998年度終了事業

- (1) 課題研究「人類の自己家畜化現象と現代文明」
- (2) 課題研究「生命体の多様性」
- (3) 準備研究「複雑系と社会科学の方法」

[6] 財団創設15周年記念事業の開催

本財団が文部省の認可を受けて創設（1984年8月22日設置認可）されて、1999年度で15年目を迎えかえることから、財団創設15周年記念事業として、記念式典、記念学術講演会、ならびに記念出版を企画実施する。

過去15年間に亘り、本研究所の設立理念の実現化（課題探索型の学際的基礎研究）を命題として行われてきた数々の研究事業の成果を踏まえ、活動実績（研究成果）の確認ならびに公表とともに、本研究所の存在意義を世に問うことを狙う。

（1）記念式典

（2）記念学術講演会

（3）記念出版

[7] 一般公開事業

〔1〕一般公開講演会

けいはんな学研都市の中核的研究施設としての理解を深めて貰うため、広く一般の方々を対象に、公開講演会を企画・開催する。

〔2〕『親子』サイエンス・スクール

「少年・少女」サイエンススクールは、21世紀を担う子供達を対象に、著名な研究者との触れ合いを通して創造性と科学への夢を導き出すことを目的として、1994年度から始めたセミナー事業である。

1997年度以降は、諸般の事情により1泊2日のプログラムを変更し、日帰りの「親子」サイエンススクールとして企画・実施した。

なお、1998年度は台風接近のため止むを得ず中止したが、1999年度においても前年度と同様の企画にて事業化を図る予定である。

[8] 広報活動

〔1〕広報誌「こうとうけん」ならびに「IIAS NEWS LETTER」の発行

広報誌「こうとうけん」ならびにニュース誌「IIAS NEWS LETTER」の一層の充実を図り、関係機関ならびに関係者に配布する。

〔2〕インターネットホームページの充実

本研究所の概要ならびに活動内容等を広報するために設けたインターネット上のホームページの充実を図る。

ホームページのアドレスは、「<http://www.iias.or.jp/>」。

以上